

浅田舞・真央の物語

フェイスブックにて下記の物語を知りました。
どこまでが本当かどうか分かりませんが、感動的な話なのでご紹介します。

(下記、フェイスブック投稿記事より)
浅田真央の今日の演技を一番喜んだのは、実姉・舞だったと思う。
姉妹揃ってスケート靴を履いてきた。
しかし、神様は誰が見ても、不公平と思えるほどの才能を妹に与えた。

焦る舞は、母にスケート靴をぶつけて解消したこともあったという。
その母は、肝臓がんと戦っていた。
バンクーバーからの4年。
この姉妹は、フィギュアの他に母の病との戦いも強いられてきたのである。
母を良くするためには、肝臓移植手術が必要だった。
姉妹はともに、HLA（ヒト白血球型抗原）の相性を調べている。
適合すれば、真央はフィギュアを捨て、母のために肝臓を差し出すつもりだったという。

適合したのは、姉・舞だった。
「母のためには、なんでもするよ」姉妹はともにこう言った。

道は、分れる。

舞は、肝臓を分け与えること。
真央は、金メダルをとること。

母の匡子さんは、娘たちの言葉に泣いたという。
しかし医者には、こう伝えたそうだ。
「娘たちの体にメスは入れられない」

母の決意は固く、結局父親の肝臓を受け入れるものの適合せず。
壮絶な拒絶反応の中で、真央の金メダルを見ることなく、48歳の若さで、この世を去った。あまりに有名な話なので、ご存知の方も多いだろう。

私が、泣いたのは匡子さんがなくなったあとの姉妹だ。
肝臓を拒否された舞さん。
しかも、妹の真央が「引退」をほのめかしていたという。
母の夢がこわれそうになる中で、舞さんは、真央と小旅行に誘っていた。

かける言葉はなかった。
こんなとき、言葉は何の役にも立たない。
何かを発するとすべてが壊れてしまうほど、デリケートな関係のまま二人は旅にでた。

テニスをやっていたそうだ。
言葉の代わりに、白球を打ち返し合った。
テニスボールに、互いの思いをこめた。
何時間も、ただただ白球が行き交ったという。
真央の復活は、このテニスがきっかけになった。
朝になれば、マスコミは、天国の母に、真央の演技が届いた！と書き立てるに違いない。
もちろん、それもある。

しかし、もうひとつ。

フィギュアの才能を妹ほどに与えられることもなく、ドナー適合検査には、「良好」と判断されながらも母に拒絶され、妹の「引退」を食い止めるために、無言で白球を打ち返していた舞さんがいる。

神に怒りを覚えるほどの不公平に耐えてきた姉がいるのだ。

神様は今年、大きな夢を叶えるために、過酷な試練を与えると云った。

羽生結弦には震災を、高橋大輔には困窮を、浅田真央には母の病。

神の与える試練としては、どれもこれも手厳しい。

しかし、浅田舞さんに思いを馳せるとき、彼女も真央と同レベル、いやもしかするとそれを超える試練を与えられてきたのかもしれない。

オリンピックとか、金メダルとか、そんなレベルをはるかに超えた家族の、人間の人を思う気持ちの素晴らしさを見せてくれた浅田匡子、舞、真央。

人智を超える神の試練を人間が乗り越えられることを彼女たちは、世界の人々に証明してくれたのである。

言葉では何も伝えられないことを知りつつ。

感動を、ありがとう。

浅田真央と舞、オリンピックにてスケートの羽生選手。そしてジャンプの葛西選手。

日本人として誇らしいですね。

この話、いかがですか？

神はその試練を耐えられる人にしか、試練を与えないという。

その試練を乗り越えた時に、まったく違う世界が見えると言う。